

『イエスが嘆かれた不信仰』

'21/05/02

聖書箇所:マルコの福音書 9 章 14-29 節(新約 p.83-)

マルコ伝をここまで学んできて、イエス様は、何度か、様々な者たちの不信仰について嘆いておられました…。今回のみことばも、まさしく、それと同様で…。果たして、私たちが普段何気なく、口にしている「信仰」とは一体何なのか？一体、イエス様は、私たちに、どういったような信仰を期待していらっしゃるのか？ということを変えて考えさせられます…。

果たして、皆さんは、「信仰って何ですか？」と尋ねられて、すんなりと答えることができますか？「知っている、信じているとは、具体的に、どう違うんですか？」と尋ねられて、分かりやすく答えることができるでしょうか？…正直言って、私は、これまでに、そういったことを何度か尋ねられたことがあります。「私は、イエス様が、私の罪のために死んで、よみがえってくださったことを知っています！信じています！それって、本物の信仰じゃないんですか？」って…。

命題:イエス様が嘆かれた不信仰とは、どういったものだったでしょう？

今回のみことばは、そういったような…、「聖書が教えてくれている信仰」と、それと混同しやすい…、単なる知識や頭だけの信仰との差…、その違いについて教えてくれるものであると思います。今日は、イエス様が嘆かれた不信仰とは、どういったようなものだったのか？というテーマでもって、聖書のみことばを学んでいきたいと思います。そうすることによって、願わくは、今日このメッセージを聞いてくださった皆さんが、イエス様の期待しておられたような、本物の信仰を持つことができ…、「自分は救われていると思っていたが、実は違っていた…」というようなことが、少しでも少なくなっていく、ということを願います。

I・弟子たちの不信仰！(14-19 節)

どうぞ、まずは、今日のみことばの内、14-19 節をご覧ください。このみことばが、まず、教えてくれていることは、**イエス様が選ばれた…、あの12“弟子たち”の不信仰について**、であります。一体、彼らのどこが不信仰であったのでしょうか？どうか、そういったことを意識しながら、ここ 14-19 節のみことばをお聞かせください。

14 さて、彼らが、弟子たちのところに帰って来て、見ると、その回りに大ぜいの人の群れがあり、また、律法学者たちが弟子たちと論じ合っていた。

15 そしてすぐ、群衆はみな、イエスを見ると驚き、走り寄って来て、あいさつをした。

16 イエスは彼らに、「あなたがたは弟子たちと何を議論しているのですか」と聞かれた。

17 すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。

18 その霊が息子にとりつくと、所かまわず彼を押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それでお弟子たちに、霊を追い出すよう願ったのですが、できませんでした。」

19 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」

●この時の 状況

今日の出来事の少し前、イエス様は、12弟子たちの内、ペテロとヤコブとヨハネの3人だけを連れて、ある山(ヘルモン山?)で、イエス様のお姿が変わるという、奇蹟をお見せになりました。今日の出来事は、

恐らく、その直後と言うか、並行記事のルカ伝 9 章を見てみると、その翌日であったことが分かります。ですから、ここ 14 節で言われている、『彼らが…』というのは、イエス様と3人の弟子たちのことを言っています。そうして、そのすぐ後に記されてある『弟子たち…』というのは、ペテロとヤコブとヨハネを除いた9人の弟子たちということになります。

さて、この時、イエス様とその3人の弟子たちが山から下ってきた時、そこに、9人の弟子たちと律法学者たちが何か言い争っていたようで、それを、大勢の群衆が見ていたようです。…そんな時、イエス様たちが山から戻ってこられたようで、群衆たちは、イエス様のところへ『走り寄って来』たようです。

すると、17-18 節、群衆のある者がこう説明します、『先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。その霊が息子にとりつくと、所かまわず彼を押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それでお弟子たちに、霊を追い出すよう願ったのですが、できませんでした。』と、こういうわけです。すると、それを聞いたイエス様は、19 節で、こんな風におっしゃいます、『ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。』って…。

皆さん、この時、一体どうして、イエス様が嘆かれたか分かっていただけますか？…実は、イエス様の弟子たちは、この時、悪霊を追い出すことができたはずなのです。…どうぞ、できましたら、マルコ 6:7-8 をご覧ください。そこをご覧くださいと、こうあります、『7 また、十二弟子を呼び、ふたりずつ遣わし始め、彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになった。8 また、彼らにこう命じられた。「旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません。パンも、袋も、胴巻に金も持って行ってはいけません。』と続いています。

皆さん、気付いてくださいましたか？…この時、イエス様は、12人の弟子たちに、どんな権威を与えられたとありましたか？⇒『汚れた霊を追い出す権威』でしょ！…だから、そのすぐ後の 12-13 節をご覧ください。『12 こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、13 悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。』とあります。皆さん、良いですか？この時、弟子たちは皆、悪霊を追い出すことができたのです！…しかも、ここで言われている弟子たちの中には、イエス様のことを裏切った、あのイスカリオテのことを含んでいます。イスカリオテは救われていなかったのに、イエス様から、特別な…、つまり、悪霊を追い出す権威を与えられて、彼もまた、悪霊を追い出すという一種の奇蹟を行なうことができたのです。そうでしょ！

このように、この時の弟子たちは皆、悪霊を追い出すという権威を、イエス様から与えられておりました。だから、彼らは皆、本当ならば、悪霊を追い出すことができたはずなのです。しかし、どういうわけか、今日のみことば…、マルコ 9 章に出てくる悪霊を、この時、9人の弟子たちは追い出すことができませんでした。そう、今日のみことばは教えてくれています。どうぞ、もうしばらく、ここマルコ伝 6 章のみことばを開いたままで、お聞かせください。

●弟子たちの 問題

さて、その悪霊を追い出せなかった理由は、どこにあったのか？イエス様のお言葉に、そのヒントがあります。イエス様は、今日のみことばの 19 節で、こうおっしゃっておられます、『ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。』って…。いかがです？皆さん？イエス様の、このお言葉を聞いたら、悪霊を追い出せなかった原因が、イエス様が与えてくださった権威に原因があったのか？それとも、弟子たちの側に原因があったのか？分かってもらえるでしょ？

⇒そうです！ここで、弟子たちが悪霊を追い出せなかった、その原因は、イエス様ではなく、弟子たちの側にあったのです！…だから、イエス様は、弟子たちの不信仰を嘆かれたわけなのです。…多分、皆さんは今、マルコ伝6章を開いてくださっていると思いますので、どうぞ、そのマルコ6:4-6に注目してみてください。このみことばは、つい最近も引用させていただきましたけれども…、この時、イエス様は、ご自分の郷里へ立ち寄られました。しかし、悲しいことに、その者たちは皆、イエス様の幼少期を知っているだけに、イエス様のことを、“子ども扱い”じゃないでしょうけれども、救い主として見ることはできなかったようです。だから、そこには、このように記されています。『4 イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」5 それで、そこでは何一つ力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。』(マルコ6:4-6)

⇒皆さん、分かっていますでしょ？…この時、イエス様の郷里、ガリラヤのナザレに住んでいた者たちは、確かに、イエス様のことをよく知っていました。しかし、それらは皆、霊的な知識ではありませんでした。そのため、その郷里の者たちは、イエス様に期待することができなかったため、イエス様は、そこでは、ほとんど、大きな奇蹟を行なうことができなかった、というわけです。

それと同じようなことを、イエス様は、今日のみことばでもおっしゃるわけです。この時、弟子たちが、悪霊を追い出すことができなかったのは、彼ら弟子たちの信仰…、つまり、神様に期待する気持ちが十分でなかったことが原因であったのです。

実は、今日のみことばの平行記事であるマタイ17:17-20には、こんな風にあります。『17 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょう。いつまであなたがたがまんしていななければならないのでしょう。その子をわたしのところに連れて来なさい。」18 そして、イエスがその子をおしかりになると、悪霊は彼らから出て行き、その子はその時から直った。19 そのとき、弟子たちはそつとイエスのもとに来て、言った。「なぜ、私たちには悪霊を追い出せなかったのですか。」20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、『ここからあそこに移れ』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。』』

いかがです？…特に、最後の20節の部分ですが、からし種というのは、イスラエルの地方では、最も小さな種だと言われています。…つまり、イエス様がここで言われているのは、「信仰というのは、大きい小さいではない」ということです。からし種のような…、ちっぽけな信仰でもあれば、あなた方には、それができたはずだ！ということ、イエス様はここでおっしゃるわけです。…でも、どうぞ、皆さん、気を付けてください。ここで、イエス様は、この言葉を12人の弟子たちに対しておっしゃったわけで、決して、私たち…、今のクリスチャンたち全員が、信仰さえあれば、何か奇蹟を行なえる！ということ、このみことばが教えているわけではありませんよね？

II・ある 父親 の不信仰！(20-27 節)

どうぞ、今度は、今日のみことばの20-27節を見ていきましょう。ここでは、この時、悪霊に憑かれていた子どもの“父親”の不信仰について記されています。じゃあ、今度は、その父親の、どういった点が問題であったのか？そのことを一緒に確認していきましょう。そこには、こう記されています。

20 そこで、人々はイエスのところにその子連れて来た。その子がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。

21 イエスはその子の父親に尋ねられた。「この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。」父親は言った。「幼い時からです。」

22 この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」

23 するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」

24 するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

25 イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」

26 するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、「この子は死んでしまった」と言った。

27 しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。

●この父親の 問題

どうぞ、皆さん、まずは、ここ20節の翻訳に注目していただけます？…ここ20節のみことばでは、誰がイエスを見たか訳されています？私たちが使っている新改訳第3版では、『“その子”がイエスを見ると…』と訳されていますが、どうぞ、欄外に書かれてある、脚注の部分をご覧くださいませ？そこには、<あるいは、「霊が」>と説明されていますでしょ？…実は、このみことばを原語で観察してみると、代名詞が使われているので、「その子が(イエスを)見ると…」でも、「霊が(イエスを)見ると…」でも、どちらでも訳することができるのです。実際、このみことばを、口語訳や新共同訳では、「霊が見ると…」と訳されています。新改訳2017では、どちらでも良いような感じで、上手く翻訳されていました。

しかし、そのどちらでも、そう大差ありません。…要は、この時、弟子たちが懸命に追い出そうとしても、追い出せなかった悪霊が、イエス様をちょっと見ただけで驚いた！ということです。20節の、『…霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。』という部分がそうです。もちろん、今日のみことばを見ると、こういった症状は何度も経験済みだったようですけども、でも、このみことばは、「その子が(=霊が)イエス様を見たと同時に、霊がその子のことをひきつけさせた」という風に書かれています。つまり、この悪霊は、イエス様の正体を知っていたのです！

しかも、この悪霊は、その子どもが幼い頃から、その子どもに取りついて、ある時には、火の中や水の中に飛び込ませて、困らせていたということが、21-22節のみことばで分かります。でも、どうぞ、皆さん、今日のみことばの22節に注目してみてください。…実は、ここで、この父親の“問題点”が明らかになっているのですが、皆さんは分かっていますか？

⇒それは、22節後半の、『…ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。』という言葉です。実は、ここ22節の『もし、おできになるものなら…』という部分を、原語のギリシヤ語で観察してみると…、この父親は、「イエス様ができるのかどうか？」という心配をしていることが分かります。だから、私がチェックした英語訳聖書でも、「But if You can do anything」(NASB: NKJV)とか、「if you possibly can!」(TEV)などと翻訳されていました。…つまり、この父親は、イエス様の弟子たちが悪霊を追い出せなかったで、ひょっとしたら、イエス様も、できないのではないかとというような心配をしていたようなのです。

そうじゃないと、その次のイエス様のお言葉である、23節のみことばと繋がりませんか？23節で、イエス様は、こうおっしゃいます、『できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。』って…。イエス様が、こう言われたのは、この時、この父親が、果たして、このイエス様が悪霊を追い出せるかどうか、確信が無かった…、心配していたから、なのです。だから、このすぐ後、イエス様のお言葉を聞いて、この父親は、自分の不信仰という罪を悔い改めて、24節、『信じます。不信仰な私をお助けください！』と願うわけです。

● イエスが弟子たちに与えられた、レッスン とは？

すると、その父親の悔い改めと願いを聞いたイエスは、汚れた霊を叱って、その悪霊を子どもから追い出してくださいました。その直後、その子は死んだようになってしまいましたが、すぐに、その子は立ち上がることができました。…このように、イエス様には、不可能など無いということが証明されたのです。

さて、問題は、私たちの不信仰です。…皆さん、覚えてくださっています？この少し前の話になりますけれども、例えば、私たちは、あの「5000 人の給食」という奇蹟で、どんなことを学びました？…あの時、イエス様は、どんなことを期待しておられましたか？

あの時、イエス様は、「わたしは、例えば、5000 人の空腹であろうと、あるいは、1万人の空腹であろうと満たせるのだ！」ということをつらねるために…、つまり、イエス様の全能性？をつらねるために、あのような奇蹟をなしてくださったと思われませんか？⇒確かに、そういった側面もあったと思います。しかし、それだけじゃなかったですね？

どうぞ、皆さん。私たちが少し前に学んだ、マルコ伝 6 章でも良いのですが、できましたら、その平行箇所である、ヨハネ 6:5-9 をお聞きくださいますか？『5 イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」6 もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。7 ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」8 弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。9 「ここに少年が大麥のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。』

⇒このみことばをご覧くださいと、この時、イエス様は、ご自分で、しようとしておられることを分かった上で、あえて、ピリポを試すために、「どこからパンを買って来て、食べさせようか？」という質問をされたのだ、という風に書かれてあります。…と言いますのも、この時、イエス様は、弟子たちが…、特に、ピリポが、「私たちにはムリです。でも、イエス様なら、この人たちに食事を与えることがお出来になりますよね？」という返事が返ってくることを…、つまり、イエス様に期待し、イエス様に頼る！ということに期待しておられたではありませんか？…そうでしょ！

だから、例えば、その後でも、ガリラヤ湖で、ペテロが湖の水の上を歩いて、溺れそうになった時、イエス様は、ペテロに何とおっしゃいました？…マタイ 14:31、『信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。』と言われたわけでしょ？

そうして、その後、イエス様が称賛されたカナン人の母親が紹介されてあります。あの母親は、どうでした？あの母親は、イエス様に対する熱心かつ、イエス様なら、自分の娘を癒せる！という信仰を持っていました。…言わば、イエス様に対する全幅の信頼を持っていたのです。だから、彼女は、イエス様がおっしゃった、『それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。』(マルコ 7:29)という言葉に疑いもせずに、帰っていったわけでしょ？

どうぞ、皆さん、今度は、マルコ 8:17-21 のみことばを聞いてみてください。…この時、弟子たちは、うっかり、パンを持ってくるのを忘れた！と言って、舟の中でケンカを始めてしまったわけですよ…。『17 それに気づいてイエスは言われた。「なぜ、パンがないといって議論しているのですか。まだわからないのですか。悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。18 目があながら見えないのですか。耳があながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。19 わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」20 「四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。』

⇒皆さん、この時、イエス様が何について嘆いておられるか分かってくださいますか？…この時に至るまで、

イエス様は、様々な奇蹟を弟子たちに見せて、イエス様というお方が一体何者なのか？イエス様なら、どんなことでもお出来になる！ということ、何度も何度も、教えてくださいました。…にも関わらず、この時の弟子たちは、やれパンが無いと言ってはケンカをし…、荒波が起こったと言っては怯え…、イエス様のすぐ近くに居ながら、そのイエス様だけを見上げ、そのイエス様に信頼する、ということが学べずにいたのです。そうじゃありませんか？…実は、そういった部分が、イエス様の弟子たちと同様、この父親にも欠けていたのです。

Ⅲ・真剣に 祈ろうとしない、不信仰！ (28-29 節)

どうぞ、今日のみことばの最後の部分である、28-29 節をご覧ください。ここで、イエス様は、私たち人間が、ひょっとしたら、一番忘れがちなものについて教えてくださいました。それは、“祈り”です。このみことばは、私たちが、真の神様を信じている！イエス様を信じている！と言いながら、その神様に対して、真剣に“祈ろうとしない”不信仰について、注意 & 警告をしてくださっているのです。28-29 節には、こう記されてあります。

28 イエスが家に入られると、弟子たちがそとイエスに尋ねた。「どうしてでしょう。私たちには追い出せなかったのですが。」

29 すると、イエスは言われた。「この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」

● 神様への 信頼 が十分でない！

さて、ここで、弟子たちは、「一体、どうして、私たちでは、その悪霊を追い出せなかったのですか？」という質問をイエス様にします。すると、イエス様は、『この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません。』、つまり、「あなた方の祈りが足りなかったのですよ！」という主旨のアドバイスをしてくださいます。

じゃあ、具体的に、どうすれば良かったのでしょうか？…パリサイ人たちや律法学者たちのように、会堂や通りの四つ角で祈れば良かったのでしょうか？⇒いいえ。そんなことをイエス様は教えたかったわけではありません。きっと皆さんは覚えてくださっているはずですよ。…つい先週、この講壇からメッセージをしてくださった近藤先生は、何を教えてくださいました？「信仰生活というものは、自分の力で、頑張って歩んでいくべきものだ！」ということを教えてくださいました？…全く、正反対でしょ！

信仰生活というものは、私たちが神様の力に頼って…、神様のみことばを実践することです。だから、私たちを通して、神様の偉大さ、神様の素晴らしさ…、つまり、神様の栄光が現わされるわけで、もしも、私たちが自分の力で…、あるいは、自分が良いと思う方法をやりきったところで、明らかにされるのは、ちっぽけな自分たちの栄光でしょ？…そんなものに、何の意味もありません。そうじゃありませんか？

大切なのは、私たちが、全知全能なる神様を見上げて…、その神様に信頼して、その神様にすべてをお任せして歩んでいくことでしょ？…そういったことを、イエス様も、弟子たちに何度も教えようとしていたんじゃないですか？…ちょうど、私たちが先週学んだ、ピリピ 2:14にはこうありました、『すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行きなさい。』って…。イエス様も、そういったことを12弟子たちに期待しておられたんじゃないですか？

イエス様は、ヨハネ 15:4 で、こう教えてくださいました。『わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様に

あなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。』⇒そのように、私たちは、真の神であられ、唯一の救い主であられるイエス様に繋がることなしに、本当に価値ある人生を歩むことはできない！ということをイエス様は、何度も教えてくださっています。そうでしょ！

今日、私がメッセージの冒頭で尋ねた、本当の信仰というものは、実際の行ないが伴う生き方です！ただ、頭で知っているだけ…、実際の行動が伴わない信仰は、本物の信仰ではありません。だから、私たちは、私たちの生き方を、決して、いい加減に考えたりしないのです！…私たちの生き方と、私たちの救いとは、決して、無関係では無いから…。

● 自分 のために祈っている？

ところで、皆さん、祈りって、何のためにあると思います。先週、近藤先生は、「祈りというのは、神様に同意することである…」というようなことを教えてくださいました。正直、私もそう思います。しかし、あえて、付け加えさせていただきますと、「祈りというのは、私たちが神様を意識して、神様のために生きるのだ！」ということ、私たちに教えてくれるものであると私は思います。

皆さん、覚えてくださっていますでしょ？…イエス様が祈りについて教えてくださった、マタイ伝 6 章で、私たちは、どんなことを学びました？…祈りってというのは、自分の願いや要求を神様にぶつけるためにするものでした？あるいは、祈る時に、「天の父なる神様」とか、「イエス様のお名前によって祈ります」というキーワードを言えば、その祈りが叶えられるということでした？違いますでしょ？

今日は、もう時間の関係もあって、マタイ伝 6 章のみことばを開きませんが、あそこでイエス様が教えてくださったのは、「何よりもまず、神様のみこころを優先しなさい！」ということだったはずですよ。…だから、私たちクリスチャンたちは皆、自分の願いや目標よりも、1 番に、神様のみこころを優先しようとするのです！だから、あのゲツセマネで祈られたイエス様の祈りもそうだったでしょ！

あの時、イエス様は、『わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはではなく、あなたのみこころのように、なさってください。』(マタイ 26:39)と祈られて、自分の願いよりも、どうぞ、父なる神様のみこころをなさってください！と祈られたのです。

また、私たちクリスチャンの祈りについて、ヤコブ書のみことばは、こう教えてくれています。『(あなたがたが) 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。』(ヤコブ 4:3)って…。少し前、マルコ伝 8:34 の、『…だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』というみことばから、私たちクリスチャンという存在は今、もう既に、自分を捨てて、どんなことがあろうと、私はイエス様についていく！という決心をしたはずですよ！そうじゃありません？

< 励ましの言葉 >

ここ最近のみことばを通して、私たちは、このイエス様こそが真唯一の神様であられ、そのイエス様を信じる以外に、救いは無い！ということを知ることができました。そのイエス様が、あの弟子たちに繰り返し繰り返し、教えようとしておられたのは、「神であるイエス様だけを信じ、そのイエス様は、すべての必要をご存知で、すべてを最善なるみこころの内になしてくださる！」ということだったんじゃないでしょうか？

皆さん、覚えておられますか？…今から 3000 年以上も前、イスラエルの民たちが約束の地カナンに入ろうとしていた時、イスラエルは、12 人の斥候、つまり、スパイを送り出したことがありました。その時、斥候たちは、どうレポートしました？12 人の内、10 人は、「神が私たちに与えようとしてくださっている地は、確かに素晴らしい場所だ！しかし、そこには、大きな民が居て、大きな城壁があるから、そこに攻め入るのはムリだ！」と言って、神様に従うことを拒みまして…。

ただ、カレブとヨシュアだけが、「いや！神様のみこころなら、必ず、それは可能だ！だから、私たちは神様のみことばに従っていくべきだ！」ということをお願いしたのです。…果たして、どちらの信仰者を、神様は喜び…、用いてくださったでしょう？…答えは明らかです。

どうか、今日このメッセージを聞いてくださった皆さんには、この聖書のみことばが教えてくれている神様というお方が、どういった御方であるかを正しく理解して下さって…、この御方に置くべき信頼とこの御方に対する献身、あるいは、従順というものを新たにさせていただきたいと思えます。そうすることが、この神様に喜ばれ…、この神様から祝福された人生を歩んでいける、1 番の近道であると信じます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。